

第1群-3

不確かさをもつ終末期がん患者に対する看護援助の検討

○岩原世子, 成岡美華子, 南部 妙,
森由理香, 下本麻宮子(高知赤十字病院)
高木美穂(前高知赤十字病院)
安岡宣容(高知女子大学)

研究目的

終末期がん患者は、健康レベルの低下とともに自己の存在の意味をも見失い、自分の人生を価値づけることが難しくなることが多く、様々な不確かさを持つと言われる。終末期がん患者のもつ不確かさについての研究は少なく、特に患者のもつ不確かさを分析し、援助した内容の報告はされていない。そこで本研究では、Mishelの不確かさモデルを用いて、癌であることを告知されている患者のもつ不確かさを分析し、援助した内容を基に看護援助のあり方を検討することを目的とした。

用語の定義

不確かさ: 病気に関係している出来事の意味を決定できないこと(Mishel,1990)

研究方法

1事例を対象とした事例研究であり、データは、Mishelの不確かさモデルに基づいて作成したインタビューガイドによる半構成的面接と初回入院から再入院後120日までのカルテの記録から得た。不確かさモデルに基づいて、対象患者のもつ不確かさを分析した後、看護の方向性について検討し、実際に援助を行った。

対象は、51歳女性、肺癌、脳転移、骨転移で、病状及び予後についての情報は全て患者に説明されていた。化学療法と脳転移に対して放射線療法を受け、一時退院したが、治療を受けていないことが不安で治療を切望し、化学療法目的で再び入院した。2クール of 化学療法を受けた後、外出と外泊を繰り返し、退院の準備を進めていた。主な症状は咳嗽と喀痰であり、時に背部痛を訴えていた。

表: 不確かさの領域と内容

領域	内容			
病気自体	癌の進行	癌の再発	癌の転移	病状
症状	今後の症状出現の仕方		今後の症状出現の有無	
将来	先の見通し			
家族	家族の落ち込み		家族内の役割遂行	
治療	治療による症状の変化		治療への執着	
自己	現実への憤り		自分らしさの喪失	

患者は、病気自体そして症状に対する不確かさを訴え、家族の側で普通の生活を送ることを望みながらも自信が持てず、家族そして将来への不確かさを感じていた。また、患者はそれらの不確かさを紛らわすように治療に固執し、自分自身や状況の

別の側面を見失っていた。そこで我々は、【症状が緩和できる】、【自信を獲得できる】、【新たな価値を発見できる】という3つの方向性で看護を展開した。

【症状が緩和できる】患者の咳嗽と喀痰喀出の状況について主治医と情報交換を積極的に行い、患者にあった鎮咳剤と去痰剤を検討するとともに、外泊時の環境の調整や含嗽指導を行い、生活に支障を来さないようにした。主治医も積極的に患者と関わり、患者が気にしている症状について説明をした。また、患者は咳嗽や喀痰を一時的な症状と捉えていたため、症状の肯定的側面について説明するとともに、症状とつき合っていくことの必要性についても説明した。喀痰の喀出に神経質になっているところも見受けられたが、ムコダイン、ムコソルバンを分3で服用し、イソジンガーゲルでの含嗽を行いつつ、症状がありながらも外出や外泊もできるようになった。

【自信を獲得できる】病棟スタッフ側が退院ということにこだわらず、可能なときに外出や外泊を繰り返せるよう配慮した。外泊時の注意と緊急時の対処法について主治医と共に説明し、帰院後外泊中に生じた問題について詳しく話を聞き、その対処法を一緒に考えた。また夫にも外出や外泊が患者にとってよい気分転換になっていることを伝え、外出や外泊の大切さを実感してもらえるように関わった。その結果、夫と二人で外出したり、外泊を繰り返しながら、できることをやっていこうと語るようになった。

【新たな価値を発見できる】患者が症状にとらわれすぎないように、症状緩和を図りながら、患者らしく日常生活が送れるように関わった。面会者との時間が過ごせるように、検温の時間を配慮したり、外出を勧めたりすることで、患者が病院以外の世界に関心を持てるようにした。また、家族の中で果たすことのできない役割だけに目を向けるのではなく、果たせている役割に患者自身が気づけるようにした。患者は症状や治療にとらわれがちであったが、姉や県外の友人の面会、外泊して家族と過ごす時間の中で喜びを実感し、治療には固執していない、今を生きることが大切と語るようになった。

考察

症状を自覚することによって不確かさが強まり、自信が持てず、新たな価値を見出すことができなかつた患者に、【症状が緩和できる】、【自信を獲得できる】、【新たな価値を発見できる】という3つの方向性で看護を展開した結果、患者は症状を自分の一部として受け入れ、退院について考えることができるようになった。この事例では、症状を軽減するための関わりを十分行うことで、症状とのつきあい方が明確になっていった。つまり、症状緩和への援助を十分行いつつ、患者が自らの症状をどのように捉えているかを知った上で、解決方法を共に考えることが重要であろう。その結果不確かさを軽減し、自信の獲得そして新たな価値の発見へとつながり、症状とつき合いながら患者らしく過ごすことができ始めたのではないかと考える。患者が不確かな状況に耐えられる力を得るためには、患者自身が問題に思っている症状を緩和し、患者自身が自信を獲得できるように関わること、そして、患者が価値を見出すことのできる条件を整えることが重要である。